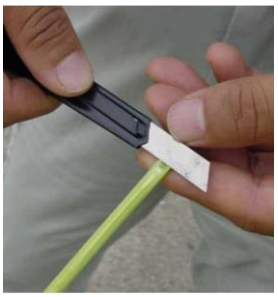
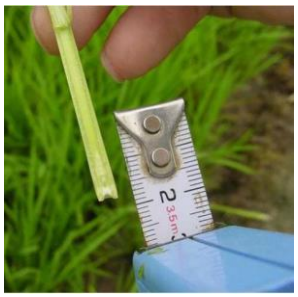
１　作　　物

項　　目	作　　業　　内　　容
	（今月の作業のポイント） ○水稲の水管理 ○水稲の病害虫防除 ○水稲の穂肥 ○大豆のは種と管理
（１）水稲の水管理	ア　早期栽培 出穂・開花期を迎え、水を最も多く必要とする時期であるため、やや深水管理とする。 イ　早植え及び普通期栽培 浅水管理や間断かん水を基本とし、根の健全化を図る。６月12日高松地方気象台発表の１か月予報では、向こう１か月の気温は平年より高い見込みであり、６月中旬以降に移植した水稲も初期生育が旺盛になることが懸念されるため、茎数を20本確保でき次第、直ちに中干しを開始する。中干しは、基本的に田植後30日頃から７～10日程度行う。強い中干しは避け、田面に小さいヒビや足跡に水が残る程度とし、その後は間断かん水とする。
（２）水稲の病害虫防除	ア　いもち病 ７月はいもち病の発病適温（24～26℃）にあたり、稲体の本病への感受性が高まる時期である。葉いもちの発生は降雨や曇天日が継続すると助長されるので、常発地では十分注意し、初期病斑を確認した時点で早めに治療効果のある薬剤で防除する。置苗は本病の発生源となるため、補植後は水田内に放置せず早期に除去する。穂いもちの発生を防ぐため、出穂期防除は必ず行う。 イ　紋枯病 普通期栽培では、通常７月中旬より発病が始まる。生育旺盛で、茎数が多いほ場で発生しやすい。防除の際には薬剤が株元まで十分に届くように散布する。 ウ　斑点米カメムシ類 多発すると等級格下げの要因となるため、早期米では発生源となるほ場周辺の除草を徹底する。なお、出穂直前の除草はカメムシ類をほ場内へと追い込むことになるため、出穂15日前までに除草する。なお、ほ場周辺の除草は、出穂20日前と出穂時に２回実施すると効果的である。薬剤防除は、出穂時の定期防除で密度を下げ、乳熟期～糊熟期（出穂後10～15日頃）を目安

項　　目	作　　業　　内　　容
	に地域の防除指針に従い実施する。また、多発時にはさらに７～10 日後に追加防除を行う。粒剤を施用する場合は出穂７日後頃に散布する。防除が必要となる水準は、穂揃い期～乳熟期において、捕虫網による 20 回すくい取り調査による個体数が、大型種で１頭、小型種で３頭となる。
（３）水稲の穂肥	短期栽培のコシヒカリ、あきたこまちでは穂肥の時期にあたり、その適期は幼穂長を目安に判断する。幼穂長は、生育中庸な株の最長稈を地際から抜き取り、カッターナイフで茎を縦に切ってその長さを計測する（写真１）。それを３～５回繰り返し、平均値を算出する。コシヒカリは幼穂長８～15 ㎜（出穂前 18～16 日）、あきたこまちは３～８㎜（出穂前 20～18 日）が、穂肥の適期である。10ａあたりの施肥量は、コシヒカリはチッ素、カリがそれぞれ３kg、あきたこまちでは窒素４kg、カリ３kgが基準となり、葉色が濃い時は減肥する。   1 最長稈を選ぶ　　2 茎を縦に切る　　3 幼穂長を測る 写真１　幼穂長の測定方法
（４）大豆のは種と管理	７月は大豆（フクユタカ）のは種期である。６月 12 日高松地方気象台の１か月予報では、向こう１か月の降水量は平年並または少ない見込みであり、今後の天気予報に注意し、適期（６月下旬～７月中旬）は種に努める。 ア　湿害対策 大豆は湿害に弱いため、は種前には弾丸暗きょやほ場周囲に周囲溝（額縁明きょ）を設け、排水対策に努める。また、は種後は滞水しないように、ほ場内に５～10 m間隔で明きょを設ける。出芽不良や子葉の黄変、落葉など湿害による生育不良が生じた場合は、その後の回復が難しく、雑草が繁茂し収量が大幅に低下するため、まき直すことも検討する。

項　　目	作　　業　　内　　容
	イ　潤水対策 　一方で、は種後の乾燥による発芽不良を防ぐ必要があり、砕土、整地、は種時の覆土・鎮圧は丁寧に行う。干ばつが生じやすいほ場では、土壌の保水性を改善するため、深耕、堆肥の施用等に努める。 ウ　雑草対策 　は種後は、すみやかに土壌処理剤を散布して雑草の発生を抑える。また大豆の生育が進んで、畝が完全に大豆で覆われるまでは、雑草が小さいうちに茎葉処理剤や中耕培土で除草する。特に帰化アサガオ類（写真２）は、つる化前に除草することが重要である。 写真２　帰化アサガオ類 エ　中耕培土 　除草や倒伏防止を目的に中耕培土を行う。１回目は本葉２～３葉の展開期に子葉節が隠れる程度、２回目は本葉５葉期に、１葉節が隠れる程度に実施する。

（作成　農林水産研究所）